

プロメテウスの罠

1463

土よ①

飯館村に実りの秋

10月3日、福島県飯館村。菅野宗夫(64)は稲刈り機をブルルトといわせた。黄金色の田んぼに、トンボがふわりと舞った。収穫するのは、市場に出荷するここのないコメだ。

道路の向こうで除染作業員が雑草を刈る音を響かせる。15000平方メートルほどの菅野の田んぼだけが、実りの秋に輝いていた。

東京電力福島第一原発の事故で、村は避難区域になった。原発からいくつも山を越えた高原の農村に、放射性物質は容赦なく降った。約6千人の村民はいまも、29都道府県と海外に散らばっている。

菅野は2012年、田んぼを自分の手で除染した。ボランティアや研究者らと立ち上げた「ふくしま再生の会」で知恵を出し合った。

国による本格的な農地除染が村で始まったのは今春だ。一般食品に含まれる放射性セシウムの上限は、食品衛生法で1キログラムあたり1000ベクレルとされている。菅野が除染した田んぼでとれた白米は12年産でも10ベクレル以下だった。それでも、地域全体の農地除染が終わらない限り出荷は認められない。それが村の方針だ。菅野も、多



試験田の稲を刈る菅野宗夫さん

れぞれ管理計画を作る。除染を終え、セシウムの吸収を抑える対策をしていることが条件だ。今年作付けしたのは、村役場と、菅野ら再生の会だけだった。田んぼを稲刈りしていた菅野は、田んぼの半分ほどで手を止めた。残りは、ボランティアたちに譲り刈る体験をしてみよう。

「楽しみながら、でも無理しない。手は刈らないでくださいわね」

今年40人ほどが集まった。インドネシアの留学生は「福島は正確な情報を知りたい」と昨年に続いて参

加した。故郷に原発の建設計画があるという。落ちた穂を一本一本拾う人を見て、菅野はうれしくなった。

「気持ちよく収穫の秋を迎えられたいなあ」

コメと野菜をつくり、和牛の繁殖を手がける。父と妻、息子夫婦と孫2人の4世代7人暮らし。その生活が、変わった。

(菅野有希子)

◇

原発事故後、飯館村で土を生きる暮らしを取り戻そうと挑む農家とボランティアの4年半を追います。

プロメテウスの罠

1464

土よ②

おやじの生きがいだ

原発事故で、今も農産物の出荷が制限される福島県飯館村。しかし、菅野宗夫(64)は避難先から通いながら、ボランティアと一緒に独自に除染した自分の田んぼで稲を育ててきた。

10月3日、稲刈りを終えると、直径10センチほどの木の棒を、どすどすと田んぼに刺した。機械

で短時間に乾燥させるより、この方がおいしい、と菅野は思う。原発事故まで、そうやって稲を干す風景が村のあちこちで見られた。

ボランティアは地面に穴を開けたり、ハンマーでたたいたり。何も使わずに杭を立てた菅野は、すっかり感心されて、思わず照れた。

「うちの親には『本当に大丈夫か』って確かめられるんだ」

翌日、菅野は父の次男(92)を連れてきた。次男は早速、タオルを頭に巻いて田んぼに入ると、なだて杭を整え始めた。

作業後は車座になったの屋敷だ。へはああー

次男は立ち上がると、張りのある歌声を響かせた。少し酒が入って、顔がほんのり赤い。

「飯館よいとて、そなたぞうだぞうだ、おちがあ里ー」

佐須地区にある、この田畑も、自宅がある場所も、次男が戦後、開墾した土地だ。



歌う父を見守る宗夫さん(右端)

戦中は朝鮮半島や台湾に出征。機銃掃射に襲われ、積んであった枕木の隙間に体を押し込んで命拾ったこともあった。

故郷へ引き揚げ、この土地をひらいた。牛を飼って酪農も始めた。自宅の囲炉裏は掘りこたつに変わった。柱は当時のままだ。

そんな父・次男に対して、菅野はずっと悔やんでいることがある。

震災翌月の2011年4月、自宅脇のミニクワッドで草むしりをしていたところを、「何やってるの!」と強くどがめてしまった。

被曝を避けるため外に出ないよう言われていたときだ。振り向いた次男は、血の気のない顔をしていた。家族が食べる野菜をつくること、土をさわるのが生きがいなんだと思いはらされた。

「おやじの人生、このままで終わらせたくない」

田畑を貸してくれる人を探し、宮城県で見つけたが、飯館の土地をあきらめることはできなかった。

「本当にだめだ」という科学的なデータはない。チャンネルじゃない言るのは嫌だ」

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1465

土よ③

18人がやってきた

福島県飯館村は2011年4月22日、計画的避難区域に指定された。そのときすでに福島第一原発の事故から1カ月以上たっていた。

だが、6月に入っても、菅野宗夫(64)は約80メートル離れた一時避難先の福島市の端から、毎日のように軽トラックで村に通った。行き先が決まっていなかった世話をしたためだ。放射性物質で汚された山や田畑を

見て、ずっと考えていた。「何か自分で出来ることはないか」

放射能を取り除く方法を試したい、と、何人も村外からやって来た。しかし、どれも長続きしなかった。

田尾陽一(74)ら18人が訪ねてきたのは、そんな時だった。

田尾は東大大学院で物理学を専攻後、ITのベンチャー企業を立ち上げ、セキュリティシステムの開発

や管理に携わった。4歳の時、疎開先の広島で被爆。爆心地から9キロの所にいた。学生時代、自分がどれくらい放射線を浴びたのか計算してみた。丘などに遮られ、ぎりぎりのところで直射を免れたとわかった。

福島第一原発の事故後も、自分なりに情報を集めた。一方で、定期的に会っていた学生時代の仲間と話す



田尾陽一さん(左)

うちに、現地に行ってみようということになった。学生運動を経験し、70歳になろうとしていた。その人生が問われていると感じるほど、福島

の事故は衝撃だった。

6月5日、東京からレンタカーで福島入りした。いわき市や相馬市で津波の被災地を見た後、飯館村に向かった。

村の風景は緑豊かな農村そのものだった。だが近づくと、線量計がピーピーと鳴りだした。

知人から紹介されていた菅野の自宅を訪ね、居間の掘りこたつを18人で囲んだ。

田尾と訪れたのは、医師や国際関係の研究者、元教師、定年退職した会社員ら。

彼らを前に菅野は言った。「私は人災だと思っています」「作る技術があったら、抑える技術も両方伴って完成された技術じゃないですか?」

自分たちが役に立っている場所を探している田尾が言うと、菅野は「一緒にやってみよう」と即答した。再び村で農業をしながら暮らせるように。その挑戦のために、自宅や農地を活動の場として貸すと言った。

この時の出会いが「ふくしま再生の会」に育っていく。

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1466

土よ回

凍土にしてはがそう

避難先から福島県飯館村に通いながら、ボランティアと自らの手で田んぼを除草した菅野宗夫(64)。

最初の除草実験は震災後初めての冬、2012年1月に試みた。

原発事故が起きるまで、冬の飯館村では「凍み餅」作りが盛んだった。自然の冷え込みを利用し、餅を凍らせて乾燥させる保存食だ。

カマボコ形の餅を数枚ずつ稲わら

でつつなげ、軒先などに干す。半日ほど水にひたしてから食べる。

菅野が地元佐須地区の農家とつくりだした「佐須こだわり農産品グループ」でも、手作りの凍み餅や凍み豆腐は自慢の品だった。

「ここは土が凍るくらい寒いんですよ」

菅野の何げない言葉に、ボランティアで立ち上げた「ふくしま再生

の会」のひとりが反応した。

東大大学院農学生命科学研究科教授の溝口勝(59)。「僕、凍土を研究してたんですよ」

溝口の専門は土壌物理学。偶然できた霜柱がきっかけで、土の凍結を研究テーマに決めた思いがある。

菅野に言われたときも、頭にあっただのは霜柱。霜柱が立ちは、放射性セシウムを多く含んだ地表面がはき



凍み豆腐＝菅野宗夫さん提供

取りやすくなる」と考えた。

福島第一原発事故で流れ出たセシウムは、福島県内の田んぼでは地表から深さ5センチ以内で多くとどまっています、という研究結果がすでに出ていたからだ。

土の凍り具合を知るために、溝口は田んぼに穴を掘ってセンサーを設置。地中の温度や水分量を測り、データを東京で見られるようにした。

12年が明け、深さ5センチの地温が0度だ。水分量も低下していることがわかった。1月8日、再生の会のメンバーが菅野の田んぼに集合した。

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

「本当たり！凍ってるよー」

プロメテウスの罠

1467

土よ回

ならば、田車作戦だ

福島県飯館村の冬は土も凍る。凍った土ははがして除去しよう。

2012年1月、菅野宗夫(64)とボランティアのメンバーが「ふくしま再生の会」はそのような実験を始めたが、凍る土の厚さは10センチになった。

これでは汚染されていない豊かな土まで削りかねない。そもそも放射性セシウムは、飯館ではどのくらい深くに分布しているのか――。

メンバーは1月下旬から3月にかけて、村内20カ所を調べてまわった。

農地の所有者の了解を得て、表面16センチの土を抜き取り、深さ20センチの土の量を測った。

やはり、おおむね表面5センチまでにセシウムを多く含んだ土があった。深くなるほど濃度は低くなる所が多かったが、同じくらい濃度で深くまで分布している所もあった。

また、同じ深さでも、濃度は場所ごとにばらつきがあった。

田んぼの立地や土質の違い、事故後に耕したり、イノシシが掘り返したりしたのが影響したらしい。

一律に凍った土をはぐ手法ではうまくいかない。菅野たちは次に「代かき除草」を試すことにした。

水をはった田んぼをかきまわらせ、セシウムは粘土成分に強く吸



田車＝ふくしま再生の会提供

着している。加えて粘土粒子は水にゆっくり沈む。その性質を利用して、泥水をかき出し、土からセシウムを分離する作戦だ。

農林水産省の技術書でも取り上げられている考えだ。問題はやはり方法だ。重機だと深く掘きすぎる。

東大大学院教授で土壌物理学を専門とする溝口勝(59)らが頭を悩ませていると、菅野が提案した。

「田車を使ってみたらどうか」

栃木県の農家に生まれた溝口はピンときた。「あれね、いかも」

田車は、田植え後に生えてきた雑草を取るための農機具だ。

早速やってみた。ウグイスが鳴く早春の田んぼに、ビシャビシャと泥水をかき混ぜる音が響いた。

しばらく混ぜた後、テニスコートを整備する横長のプランで泥水を掃き出す。それを3回繰り返した。

泥水は、敷地の一角に深さ1センチの溝を掘って流し込んだ。はき取った土を袋に入れるの比べて、廃棄物の量を減らすことも期待できた。

農家自身ができる除去方法になれば、溝口は考えていた。

ところが後日、その様子がテレビのニュースで放送されると、再生の会の事務局に一本の電話があった。「そんなことして大丈夫ですか」(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1468

土よ回

作付け、廃棄が条件

福島県飯館村で除草実験をした菅野宗夫(64)と「ふくしま再生の会」。

2012年8月、その様子をテレビで見た人から電話があった。

「そんなことして大丈夫ですか。飯館村は水源なんですよ」

除草のため、田んぼから掃き出した泥水を土中にする作業に対してだった。隣接する南相馬市の住民が心配して尋ねてきたのだ。

放射性セシウムは泥の中の粘土粒子に固定されている。事前に簡易実験で確認している。地下水にしみ出さないか監視を続ける――。

事務局のメンバーがこう説明する。菅野は同じ地域の住民としてよくわかった。事故直後、専門家やメデ

「心配するのは当たり前だ」

菅野は同じ地域の住民としてよくわかった。事故直後、専門家やメデ

「だからこそ、データを継続的にとっていかねば」

泥水を入れた溝の底と側面の土を採り、セシウムの濃度を測った。すでに水は干上がっていたが、浸透はほぼ10センチまでの、地下水に達していなかった。結果はホームページに掲載した。



試験田の看板

この年の春、独自に除草した田んぼで、試験的に稲を植えた。

民間団体単独の作付けは認められなかった。栽培できたのは「農業・食品産業技術総合研究機構」(農研機構)と協定を結んだからだ。

その条件として、とれたコメはすべて廃棄処分することに同意した。

収穫したコメのセシウムの濃度を東大で測ってもらった。玄米で1キログラムあたり40以下。白米で10以下だった。一般食品の上限100以下を下回った。

除草後に、カリウム肥料を入れた区画と、入れない区画も比べた。入れた区画のコメの方がセシウム濃度は低かった。カリウムに、稲がセシ

ウムを吸収するのを抑える働きがあることも確認できた。

13年は単独で作付けした。セシウム濃度はまだ上限を下回ったが、やはり廃棄処分しなければならなかった。

ところが、国の委託研究として除草し、植えられたコメは運んだ。

セシウム濃度が上限を下回ることを確認後、東京などで開いた報告会で希望者に配布された。

どうせ上限以下なのに――。

菅野はもどかしかった。

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1469

土よ回

「削る除染」失うもの

2012年、福島県飯館村の菅野宗夫(64)「ふくしま再生の会」は自分たちで田んぼを除染して、コメを試験栽培した。

コメから上限を超える放射性セシウムは検出されなかった。だが、すべて廃棄させられた。

菅野らは自分たちの除染の有効性を村役場に報告し、方法の一つとして採用できることを提案した。

再生の会理事長の田尾陽一(74)、東大大学院教授の溝口勝(56)も一緒だった。応じた村の復興対策課長(現・除染推進課長)の中川喜昭(57)と押し問答になった。

「今までの流れがある。そんな簡単に言われても困る」

飯館村は国が直轄で除染する。除染を担当する環境省(注)の村での除染を表土の削り取りでいくと決め、村

民に説明していた。

中川ら村の職員は、環境省と村民との調整に汗をかき、やっと一部で除染を始められるという時だった。

「国は広い面積を除染しなきゃならない。一つの方針でいかにいかに難しい」と中川は言う。

だが中川も国の役人の対応を歯がゆく感じる時があった。村民の要望を伝えても、担当者は「検討しませんでしたの」。



国による除染を終えた田んぼ。表土を削り取って客土してある

農林水産省は農地除染対策の技術書で①表土削り取り②水による土壌攪拌・除去③反転耕、④の三つの方法を取り上げている。

②は菅野らが試みた代かきと同じ要領で、⑤は上下の土を入れ替える方法だ。どの方法をとるか、土壌のセシウム濃度に応じ、関係者の意向を考慮して選ぶ、とある。

だが村内で実施されているのは、①の削り取りだけだ。線量が高い▽②では時間がかかる▽別々の対応も難しい、と環境省側は説明する。

加えて、反転耕や水による攪拌・

除去には村民から「汚染された土がすーっとそこに残ってんだべ? どういたすするかわかんねえ」と「全部持って行ってもらう」と、批判的な声が多くあがったという。

それだけ「不信や怒り」がこぼれ出た。菅野は思う。

「しかし、一律の削り取りだと、長年かけて豊かになった、農業に大切な土を失うリスクも大きい。もっと丁寧に行きたい」

菅野は帰村後を見据える。

「村に帰って何で食べてへんの?」

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1470

土よ回

先祖が残した杉林

プロメテウス(人類に火を与えたギリシア神話の神族)

国の除染が始まる前に、専門家をまじえたボランティアと一緒に、福島県飯館村の田んぼの除染に挑んだ菅野宗夫(64)。

当初は他の村民から「どうせデータは改ざんされて出されるんだべ」とはねつけられた。

それは「専門家」への不信感が広がっていた。「そんなこと、やらなくていい」とも言われた。

そんななか、宗夫と同じように、村で独自の除染実験にあたってきた農家に、菅野啓一(60)がいる。

居久根と言われる農家の除染に取り組んでいた。

啓一の自宅は村の南西部、比叡地区にある。

高さ20センチほどの杉林が家の背に立ち並ぶ。これが居久根だ。

「この杉はよ、先祖が次の世代に

いくらかでも役に立つようにつけて送り送っている」

比叡地区は村内でも標高が高く、冷害が多かった。そういう時は、木をお金に換えれば食べていける。

家の建材にもなる。啓一も約30年前、今の家を建てるときに居久根の杉を自分で切って使った。

寒冷な気候のためか目が詰まっていて「秋田杉にも負けないくらい



住宅の裏手に広がる居久根

だど製材所で言われたこともある。居久根の木は切ったら種をまく。そうして維持してきた。

家は啓一で5代目。一人っ子で、父を早くに亡くした。中学校を出てすぐ親世代の大人たちと地区の共同作業を担ってきた。稲作に和牛の繁殖、トルコキョウ栽培、冬は出稼ぎで土木工事をした時期もある。

2012年7月、宗夫から紹介された「ふくしま再生の会」の協力を得て、家の周りの線量を測った。

地上1.5メートルの高さで、玄関前は毎時2.7マイクロシーベルトだったのに、家の裏側は9.0には上がった。屋内も、玄関横の居間が1.8で、2階の廊下は2.8だった。

コケがっついていた屋根瓦を高圧洗

浄し、放射能がたまりやすい雨どい下の土を取り除いた。

居久根の杉の枝打ちをし、落ち葉を取り除いた。だが思うように線量が下がらない。さらに枝打ちする高さを上げ、居久根の中の土もジョウロカーで約10センチ削った。

家の裏は2.0にまで下がった。「線量下げる努力していかないと何やってんだ」とって祖先に言われたと思う。子孫にも「誰の時だった」と。せつねえべし。やっぱり、挑戦だと思っただけだ。

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1471

土よ回

自宅の年間被曝量は

プロメテウス(人類に火を与えたギリシア神話の神族)

居久根。福島県飯館村の農家が代々、維持してきた農家だ。

その、農家にとっての財産が、放射線量を高止まりさせる原因になっていた。

環境省による居久根の除染は当初、手が届く高さの枝打ちで、落ち葉も枝を取り除くだけだった。

「線量が高い所も、低い所も、同じやり方でいいのか」

飯館村で菅野宗夫(64)とともにボランティアの協力を得て、独自の除染に取り組んでいた菅野啓一(61)はずっと疑問に思っていた。

今年9月、自宅東側の杉林で線量を測った。環境省が除染した場所だったが毎時0.9マイクロシーベルトあった。ここは南東方向に開けた田畑に面している。福島第一原発の事故後、原発方向から流れてきた放射能雲が

まともにあたったと啓一は考える。飯館村は2012年、次の三つの避難指示区域に分けられた。

- ▽避難指示解除準備区域
- ▽居住制限区域
- ▽帰還困難区域

ひとつの村でも、放射線量がそれだけ異なる。そこに居久根という要素も加わる。

啓一の自宅がある比叡地区は「居



菅野啓一さん

住制限区域に入り、11月4日時点で、宅地の年間線量は1時間あたり0.85マイクロシーベルトだった。

居久根からの放射線を心配する声は多く、環境省は村の要望を受け、住居から10分の範囲内に限って木を伐採することにした。

さらに啓一は地区の仲間と、居久根の土を削る独自の除染実験の結果をもとに、そうした対応も、環境省に要望。居久根の土削りも試験的に行われる方向だ。

政府は帰還困難区域以外は17年3月までに避難指示を解除することを目指している。

一方、追加被曝線量の長期目標は年1マイクロシーベルトとしている。

啓一はこの秋、実際に村の自宅へ生活した場合、被曝量がどれくらいになるか、ボランティアと調べた。室内や居久根、庭など11カ所について、そこに24時間いたして、それぞれの1年あたりの数値(単位:ミリシーベルト)を出してみた。

居間2.72▽2階3.55▽自宅前の庭5.86▽除染後の居久根13.08。最高は自宅東側にある氏神の祠付近で、国の除染が終わっているが20.12あった。

「年1マイクロシーベルト」は遠い。「このデータが一番必要なんだ」

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1472

土よ 10

農地に邪魔な汚染物

福島県飯館村で、菅野宗夫(64)と同じように、独自の除染を試してきた菅野(61)。

原発事故後、地元区長だった啓一は、菅野(63)と二人で地区内の約80戸を回り、線量を測った。菅野は、長年地域づくりにとらわれてきた仲間だ。

地区では「三匹獅子舞」という民俗芸能が受け継がれてきた。

天明の飢饉では人口が激減した。太平洋から内陸へ塩を運んだ「塩の道」が通っていた……。

そういった歴史を調べ、一緒に地域史をまとめたこともある。

避難後も、地区をパトロールしながら、ほかの住民もまじえて交代で地区内の線量を測り続けている。

「この地域は、まだまだ捨てたもんじゃねえ」と啓一は思う。

国による住宅周りの除染が今年一通り終わったことを受けて、啓一は再び地区内の線量を測った。

原付きバイクを中古で買い、荷台にGPS機能つきの線量計を積んで、10分ずつ測って回った。

自宅のリフォームも始めた。

今は福島市に避難しているが、いすれ帰村してトルコギキョウの栽培を再開するつもりだ。



除染廃棄物が置かれた農地

寒暖差が花の色を鮮やかにする。うんと、きれいな花を咲かせてもらうと思う。

「コメや野菜の出荷再開には10年はかかる覚悟する。出荷して、もし基準を超える放射性セシウムが検出されたら、廃棄は計り知れない。そのためにも、線量を下げよう努力を続け、測り続ける。第3種放射線取扱主任者の資格も取得した。」

「ここまじやうと、次の世代に渡すのは俺らの仕事」

花栽培を再開したら、多くの人に「見に来てもらう、そんなことも夢見ている。」

「ただ、汚染物が邪魔になる」

啓一が言う汚染物は、国の除染で出た汚染土などの黒い袋。地区の中

心部に広がる、日当たりの良い農地に山積みになっている。

中間貯蔵施設に運ぶまでの「仮置き場」という位置づけだ。

本来なら「仮置き場」に置く予定だったが、村が提案した山間部は造成に時間がかかる。除染を急ぐため環境省が「平らな所」を求めた。

村内には、そんな「仮置き場」が行政区ごとにある。ほんのどが、広くて条件のいい農地だ。

ボランティアたちが除染して稲を育てる田んぼも、周辺は「仮置き場」になる予定だ。(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1473

土よ 11

田が冠水 濃度は

1時間に59mm。

今年9月10日夜、福島県飯館村。菅野宗夫(64)の自宅屋根に取り付けてある雨量計が、すさまじい豪雨を記録していた。

翌日、避難先から駆け付けた菅野は、自宅まで車が入れなかった。あふれた川の水でアスファルトがめくれ、道路が陥没していた。玄関も約10センチ浸水し、泥だらけだった。

ボランティアや研究者ら「ふくしま再生の会」のメンバーたちと独自に除染し、稲を育てていた田んぼも一変していた。

川の水と一緒に土砂や木片が流れ込み、穂をつけた若い稲が半分ほどなぎ倒されていた。

「でも、貴重なデータだ」

菅野は悲観してはいなかった。川の土砂は除染されていない山

林。豪雨が地表を流したはずだった。その水が、田んぼの土やコメにどう影響するか……。

その対策を考える、またとない機会だと思った。

そのためにも、収穫に近づける必要があった。まず始めたのは田んぼを囲む電気柵の復旧。サルやイノシシに荒らされるのを防ぐためだ。

倒れた支柱を土砂の中から掘り起



川から大量の砂が流れ込んだ

こし、ネットに絡みついた木の根やごみを取り除きながら張り直す。根気のある作業だったが、ボランティアのおかげで2日で終わった。

2カ月後、東大の施設に依頼していた田んぼの土の測定結果が菅野のもとに届いた。

川からの土砂がたまっていた所で土を抜き取り、深さごとの放射性セシウムの濃度を測ったものだ。

興味深い変化があった。

浅いところにある粗い砂状の部分より、その下の細かい泥状の部分のほうが濃度が高くなっていた。

1グラムあたり5千ベクレルを超え、冠水前の3千〜4千よりも高くなっていた。

菅野たちの推測はこうだ。(菅野有希子)

冠水が2回に分けてあり、1回目は比較的濃度の高い泥、2回目は比較的低い砂が流れてきた。田んぼは二つの川の合流地点にあり、それが冠水をもたらしたのではないかと菅野は考えた。菅野は、除染で出た汚染土などを入れた袋が川に流されていたこともわかった。川沿いの農地に一時的に置かれていたもので、一部は中身が流れ出ていた。

農業再開に向けて不安は尽きないが、データ分析を続けて次の手を打つ。菅野たちはそう考えている。(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1474

土よ 12

サークル「までい」

福島県飯館村で独自に除染し、稲を育てていた菅野宗夫(64)。その田んぼに9月、豪雨であふれた川の水や土砂が流れ込んだ。

川の上流は除染していない山。田んぼの土にどう影響しているか。調べるため、とくに被害が大きかった場所まで深さ約20センチの土を抜き取り、東大に送った。

菅野がボランティアや研究者らと

つくる「ふくしま再生の会」は、村で採取した土や植物などに比べ、放射性物質が含まれているか、東大農学部の放射性同位元素施設で測定してもらっている。

東大で、送られてきた土を専用容器に詰め替えたり、重さを量ったりする作業は、農学部の事務職員らが勤務とは別に取り組んでいる。

そのためにサークルまで設け、

「までい」と名付けた。

「までい」とは飯館の言葉で、「丁寧に、心を込めて」という意味だ。

農学生命科学研究科が村に研究協力することになり、2012年秋、東京にいながらでも協力しようと思った職員たちが結成した。

週1回、昼休みや夕方に作業する。教員やボランティアも加わり、入れ替わりで20人ほどが集まる。



「までい」で測定の準備をする

これまでに測定したものは1方を超える。アケビ、キノコ、柿……。イノシシの脚まであった。

10月6日。その「までい」に菅野

の田んぼで採った土が届いた。

「わあ、砂だね」

定年後も非常勤で職員を続ける菅野(64)が言った。サークルの世話役を務めている。

田んぼの土は、直径5センチの円筒状のプラスチックケースに入っている。深さごとの数値を出すため、よくかんを切るように土を2センチずつ輪切りにして、20ミリリットル入りの容器に入れた。

「この、深さ何センチの土か、番号をつけて管理する。測定が済んだら、飯館村の活動拠点に戻す。」

こうして一連の流れは、作業をやりながらマニュアル化してきた。

斎藤が再生の会と出会ったのは、震災があった11年の夏。知人を通じて「一度、飯館に遊びに来なよ」と誘われた。

斎藤は「考えておきます」と答えたが、乗り気じゃなかった。

決して遊びに行くような所じゃない。むしろ、自分としては距離を置いていた。

ところが、その後、斎藤は、福島に対するそんなイメージを改めることになる。(菅野有希子)

プロメテウスの罫

1475

土よ 13

年寄りの尊厳

福島県飯館村で農業復活の道を探る菅野宗夫(64)ら「ふくしま再生の会」は、田んぼの土や稲の放射能測定を東大の施設に頼んでいる。準備作業を取りまどめる農学部の非常勤職員齋藤真子(67)は、はじめのうち活動を遠目に見ていた。だが、その考えは変わっていく。2011年12月。

再生の会の活動報告会。東京・新宿の工学院大学の教室に約60人が集まった。報告会の終盤、菅野が黒板の前で話し終ったところで、妻の千恵子(63)が突然言った。「すみません、一言いいますか」千恵子は教室の一番後ろにいたが、声を通るからとマイクを使わず一気に入話した。

「目にも光がない。顔は真っ白。飯館のおじいちゃん、おばあちゃん、真っ白な顔でなかった」「太陽の下で働いて、自然の中で生活がありました。80歳過ぎて、90になって、ダメだって人生はないでしょう。それが一番悔しいです」「どういふ言葉で伝えていいかわからないです。ただ、一人の人間として、尊敬するという言葉、頭に入れてほしいと思います」



菅野宗夫さんと千恵子さん

約10分間、思いをぶつけるように話したのは、村で土を耕して生きてきたお年寄りのことだった。慣れた山で山菜やキノコを探るこ

とも、野菜をつかって食べてもらうこともできず、狭く壁の薄い仮設住宅で小さく生きて過ごしている。そのことへの怒りがじんだ。さらに、半年後の報告会。こんなには別々に避難する孫たちへの思いを話し、こう訴えた。「家畜、空気、山、花、全部含んだ家族なんです。どうぞいらしてください。見てください」

「戻る人も戻らない人も、飯館をどうしようという気持ちには変わらぬ。ただ強制はだめだ。もともと集まって、話すべきだと思っただけだ。」「周囲の人の意見はほらほらで、いろんなことを言う人がいます。どう乗り越えて前に進んでいますか」菅野は、自分の活動も最初は理解されなかったものの、一緒に活動するメンバーと地区の会合で説明していくうちに、受け入れられるようになってきたことを話した。

プロメテウスの罫

1476

土よ 14

祖父の心が見えた

ボランティアと農地の除染実験などに取り組む福島県飯館村の菅野宗夫(64)。その自宅には、学生や留学生たちがよく見学に訪れる。今年9月初めにはフェリス学院大学(横浜)の学生ら6人がきた。震災直後の様子や現状を菅野から聞いた後、村内を車でまわった。村役場や無人の小学校、汚染土などを入れた黒い袋が山積み

ぼ。空間線量も測った。翌日、学生たちは掘りかたつを囲んで菅野の話聞いた。その一人、4年の清水葉月(22)は飯館村に接する浪江町の出身。自宅も避難指示区域にある。福島第一原発の事故が起きるまで祖父父母と両親、きょうだいの7人暮らしだった。毎年5月の連休は家族総出の田植

え。暑いし、きつかったが、畦に座って休憩する時間が楽しかった。うちのコメ、甘くて、すごくおいしかった。今になって思う。清水の祖父もまた、避難先の南相馬市から毎日のように浪江の家に帰り、いつか農業を再開する日のために、除染した田んぼを耕している。その姿が菅野と重なった。地道すぎて、途方もないことだと思っ



清水葉月さん(左)たち

た祖父の行動が、理解できた。「農家にとって、農業は仕事じゃなくて喜び。自然や土地をすぐ大切にする。祖父は、きれいにし

て残そうと考えると思う」清水自身は原発事故後、千葉県に避難し、高校を転校した。どう見られるのか気になって、福島県出身とかなかなか言えなかった。一方で、地元の友人とも震災のこととは話しづらかった。賠償や、町に帰るか帰らないか、置かれている状況や思いが一人ひとり違う。飯館へ行くことと思っただけは、浪江はどう復興していけばいいのか、考えたかったからだ。

清水は菅野に思い切った聞いた。「周りの人の意見はほらほらで、」

プロメテウスの罫

1477

土よ 15

米糠の香りがいい

10月15日。福島県飯館村で農業の復活に取り組む菅野宗夫(64)は、農家仲間菅野永徳(76)と東京・阿佐谷にいた。阿佐谷には宗夫や永徳が参加する「ふくしま再生の会」の事務局がある。アパートの一室を借りて、2人は、その部屋の大家、中島哲(69)が営む米穀店を訪ねた。永徳は、東京の人の多さに疲れ、

口数が少なくなっていた。ところが中島の店に入るなり目を輝かせた。「この香りがいい。米糠のね」昔ながらの精米機が今も使われていることがうれしかった。高き33センチもある精米機は中島の親の時代から使っている。木の柱の中を通るベルトコンベヤーで玄米を運び、精米を7、8回繰り返す。「コメコメハひつてのは、急いじゃ

だめなんだよな」と、中島。最新の精米機より時間も手間もかかるが、うまみを損なわない。「また福島のコメを置くことになりました。まず会津産からね」中島は10年以上前から会津地域にある喜多方市のコメを扱ってきた。農家が飛び込みで営業に来たのがきっかけだ。当時は珍しい、生産者の写真入り米袋を持っていた。それ



左から永徳さん、宗夫さん、中島さん

だけ味に自信があったのだ。菅野「本並(ほんび)にこんなことがなきゃねえ」福島第一原発の事故後も、生産者が放射性物質の検査について記した

チラシを配り、売りが続けた。当初は客も買ってくれてはいた。だが、2011年10月に福島県が「安全宣言」を出した後、放射性セシウムの上限を超えるコメが見つかる。翌年から、上限の値そのものが引き下げられた。「なるべく福島から遠く離れた所のコメがほしい」と客に言われ、島根県産が売れるようになった。徐々に福島との取引から手をひいた。ところが、持ち家の一室を「再生の会」に貸すことになる。会が飯館で活動するに聞いて心が動いた。

飯館から避難した人が「早起きで何もやることがない、それが一番苦しい」と言っていたのを思い出した。相対して思う。今年「再生の会」の報告会のチラシを店にはると、通りすがりの人が「福島のコメは売ってますか」と入ってきた。また扱おうと決めた。若い頃は生産者を訪ね、草取りを手伝い、稲の香りをかき、周りの風景を見た。だからこそ、お客さんに納めたいと思った。飯館にも絶対行く。宗夫たちに中島は約束した。(菅野有希子)

プロメテウスの農

1478

土よ 16

再開探る 稲も牛も

福島県飯館村での稲作は、畜産と深く結びついていた。稲わらは餌にし、牛舎に敷き、牛の糞尿と一緒に堆肥にして田畑で使う。そうして土づくりをしてきた。土の性質をつかみ、有機物や微生物を活用する。

「農業やる人は科学者だよ」

菅野宗夫(64)は、そう言われて納得したことがある。

菅野も稲作をしながら和牛の繁殖を手がけ、11頭の親牛を飼っていた。最初は父の次男(92)が、酪農から始めた。

「小学生のころ、牛の背中に乗って隣の家に行って叱られたなあ」

村外の高校に進学し、住み込みで新聞配達をしながら通った。北海道の帯広畜産大で学び、牛と一緒に貨車に乗って福島へ帰ってきた。

広域的な農業開発が計画され、農業が大きく変わろうとしていた時期。大変さはわかっていたが、自然のなかで営む農業にかけた。

木造の牛舎は菅野が建てた。払い下げになった小学校の体育館を解体して山越えて運んだ。瓦屋根だったのを赤い屋根にふき替え、コンクリートも自分で敷いた。

「飯館牛」は村をあげた取り組み



自分で建てた牛舎

でブランド牛として知られるようになっていく。

今、その牛舎にも牛の姿はなく、ポランテアと取り組む活動の資料

や、原発事故後に村で採取した土や植物などの保管庫が置いてある。

畜産も含めた農業再開について、村は10月、進め方や課題について話し合う検討会議を立ち上げた。

メンバーには、避難先で畜産や花栽培を続けている村民もいれば、村内のハウスでイチゴ栽培を再開した村民もいる。

予定では来年度に農地除染が終わる。だが、今も中間貯蔵施設の用地を確保できていない。それだけに、田んぼとして条件のいい場所に置かれた、汚染土などの袋は当面そのまま

まだどう。そもそも、またコメを作りたいという声は少ない。

11月にあった2回目の会合では、そんな話も出た。

菅野はメンバーではないが、村の農業委員会の会長として傍聴し、熱心にメモをとった。

安全に作れるのか、売れるのか。村で農業をまた始めたいという人がいても、不安なのだ。菅野は思う。

「国は避難指示を解除して終わりかもしれないが、俺たちはそこからがスタート。マイナスからのスタートなんだ」

(菅野有希子)

プロメテウスの農

1479

土よ 17

農業で暮らす日まで

福島県飯館村で、菅野宗夫(64)はポランテアや研究者らと除染した田んぼでコメをつくってきた。

濁った水が田んぼに入らないよう、水の管理には気をつけた。

だが、その努力も9月の豪雨で川があふれ、かき消された。

土砂が流れ込んだ田んぼでは、土壌のセシウム濃度が上がり、コメへの影響が心配だった。

この14日、出荷はしないが県の検査を受けた。妻の千恵子(63)が、祈るように見つめた。

検査機に表示されたのは丸印。17袋すべてが、1kgグラムあたり100Bqの基準を下回った。

「おとうに電話すか」

用事で来られなかった菅野に伝えようと、千恵子の声が弾んだ。

自然の恵みと厳しさを、菅野は思

う。コメがまだ十分に熟していない時期に水害があったら、また違う結果だったかもしれない。

だからこそ、データを積み重ねていくことが将来の財産になる。自分たちで測ることで、実感できる。

山の除染は手つかずで、いつまた川があふれるかわからない。国による除染が終わっても、放射能はゼロになるわけではない。



稲刈りを終えた田んぼ

「飯館でコメつくったって、どうせ売れな」

そんな声も聞かされてくる。

菅野だって、不安がないわけでは

ない。避難後、テレビをつけていないと夜眠れなくなったし、健康診断でも初めてひりかかった。

でも、毎週村へ通ってやるポランテアたちと挑戦するうちに、ストレスは減ってきたと感じる。

「放射能には出会いたくなかったけど、出会えた人たちには感謝だ」

つくったコメも、最初は廃棄しなければならなかった。それが昨年から試験を認められるようになった。

ポランテアと始めた村内の放射線測定には、他の村民も加わり、村から委託を受けるまでになった。

元通りにはならない。だけれど、このままおしまいにしてしまえるか。

村を見学に来る学生たちには「長い目で見てほしい」といっても言っている。

自分でも見つめたい。

村が、自分が、どう変わっていくのかを。

◇ (菅野有希子)

次回から第76シリーズ「立地屋」に入ります。

ご感想をはがきや手紙で送って下さい。宛先は〒104・8011朝日新聞東京本社 特別報道部です。